

新連載執筆のねらいと執筆者紹介

「イスラームから見た世界」

澤井 真

イスラームという宗教は、多くの日本人にとってはほとんど馴染みがない。しかしながら、現代世界はイスラームやムスリム（イスラーム教徒）を抜きにして理解できなくなっている。一つの事象に対する捉え方も、信仰者による語りと研究者による説明ではしばしば見解が異なる。連載では、イスラーム研究という学術的な視点のみならず、筆者の友人や知人のムスリムの声も拾い集めながら、イスラームを少しずつ紐解いていくことをめざしたい。

澤井 真（さわい まこと）

天理大学おやさと研究所講師。天理大学人間学部宗教学科を卒業後、東北大学大学院修士課程（宗教学）へ進学。カイロ・アメリカン大学大学院修士課程（イスラーム学専攻）を修了後、東北大学大学院博士課程（宗教学）を修了。2015年から2018年まで日本学術振興会特別研究員PD。イエール大学宗教学科、およびハーバード大学世界宗教研究所の客員研究員、関西大学文学部、および東京大学大学院の非常勤講師、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員を経て、2019年4月より現職。専門は天理教学、宗教学、イスラーム思想研究。

マレーシアでイスラーム学に関する招待講演

澤井 真

2月20日～21日、マレーシア・イスラーム青年運動（ABIM）からの招聘を受けて、マレーシアの首都クアラルンプールでイスラーム学に関する4つの講演を行った。今回の企画は、国際交流基金クアラルンプール（The Japan Foundation Kuala Lumpur）からの助成を受けており、東南アジア出身の若いムスリムたちが、日本を訪れて日本人との文化交流を図るTAMU（Talking with MUslims）プログラムの、いわばマレーシア版として初めて実施された。主催者であるABIMは、マレーシア国内でも大きな影響力を有するイスラーム団体である。

筆者が招聘された理由は、マレーシア国際イスラーム大学でイスラーム研究のために1年留学していたこと、宗教学を専攻する若手のイスラーム研究者であることによるものであった。そのため、国際交流基金クアラルンプールからは、日本の文化や宗教状況などを踏まえた、イスラームとの比較宗教学的な講演を要望された。4つの講演はすべて英語で行った。それらのタイトルはそれぞれ「イスラームの死生観」、「イスラーム研究と現代世界—展望と課題」、「日本におけるイスラーム研究史」、そして「人類のための慈悲—イブン・アラビーをめぐって」であった。講演の合間には、イスラーム系のシンクタンク（IDE）や、マレーシア・イスラーム青年運動（ABIM）が運営する宗教学校を表敬訪問した。日本の宗教状況ばかりではなく、天理教の教義や信仰をイスラームと比較しながら討議を展開した。

第329回研究報告会（1月22日）

天理教と社会福祉：宗教と社会貢献を考える

アダム・ライオンズ

京都アメリカ大学コンソーシアム／天理大学大学院研究員

天理養徳院は明治43年（1910年）に設立された。それ以来、天理教による児童福祉活動が100年以上の歴史を持ち、現在、天理教里親連盟が全国的に活動している。この里親活動が児童相談所と連携し、制度化されている。また昔からある「住み込み」という共同生活のパターンもある。住み込みは、教会で修行を行うために来る者もいれば、助けを求めに来る者もいるという点からみれば、2つのパターンに分けられるであろう。本発表では、まず、英語圏における学術的な天理教研究に関して、昨今出版された天理教に関する英語の研究書が少ないことを確認した。そのうえで、資料やインタビューを元にして、天理教里親活動と住み込みの習慣の繋がりについて考えたうえで、公式（official）の記録では掬いとすることができない、非公式（unofficial）な里親活動についても注目することの重要性を指摘した。現代における宗教の公共性を踏まえるとき、要保護児童を助けて育てることは、天理教の教義と実践から生まれた宗教の社会貢献の一つの代表的事例であると言えるであろう。

第330回研究報告会（2月28日）

「神の存在証明」の手法としての「実証主義」

—中山正善2代真柱における「無媒介の結合」をめぐって—

島田勝巳

本発表では、中山正善2代真柱の教学思想をめぐって、「教義確定のための作業」と「近代科学的科学主義」が「無媒介に結合」しているとする島田進の論点を戦略的に受け入れ、「特異な実証的教学の構造」と言われるその思想の特質をあらためて照射した。

まず、恩師姉崎正治の影響については、その人格主義的宗祖論に対する中山正善の「密やかな抵抗」の可能性を示唆した。さらに、最初期の『「神」「月日」及び「をや」について』から既に導出されていた「月日のやしろ」としての教祖像を基底としつつ、「おふでさき用字考」や「外冊の研究」における、徹底して教祖の真筆を重視するその姿勢に、いわば「教祖の身体の痕跡」を見出そうとする、ある種の「神の存在証明」としての含意を指摘した。最後に、客観性を確実性の要件とみなす近代歴史学の認識手続きそのものが、実はこうした中山正善の教学思想との親和性を持っていたことを指摘した。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では、「出前教学講座」についてのご依頼を受け付けております。どのようなことでも、気軽にご相談ください。お待ちしております。

詳細は、担当者佐藤孝則（電話：0743-63-8105、またはメール：tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。